

## 片付けの意味



田中 祐次

今日も保育園ではお片付けのレコードが鳴っている。自由遊びが終わってお集まりになる前のお片付けはなかなか大変である。先生の声にはげまされて、子どもたちは、ちらかた積木やおモチャをしまうのに一生涯命である。保母さんたちも最後にはお手伝いになり出される。ある子はただかき集めて箱に入れるし、またある子は、いかにもつまらなそうに歩きまわる。

三、四歳の子どもたちにとっては、お片付けはなかなかの苦痛のようである。だいたい遊びに夢中になっている子どもたちには、お片付けのかけ声さえ耳に入らないらしい。お片付けというのは、自分がせっかくなしく遊んでいるのを中断されることである。このことは、五、六歳いやそれ以上の子どもにとっても同じなのかもしれない。

「だいたい、大人は何かというところからかしている」とい

う。しかし、「ちらかしている」と見るのは他人の目からその見えるのであって、本人はその状態が今の自分にとってふさわしいのかもしれない。子どもがおモチャを自分のまわりにぎっしりしきつめて、その中で遊んでいるとき、それは子どもにとって一つの世界であり、それなりに彼の目には整理されているのかもしれない。

子どもの世界と大人のそれとは、占有する物理的空間の広さや関連する他の物への配慮の量の点で格段の差がある。しかし、大人から見たこうした狭い世界も、子どもにとっては、無限の世界にも匹敵する。それは、幼児の自己中心性といふことから説明されることであろう。彼らの世界は常に現在であり、ここにあるといつてもいいすぎではない。子どもは、遊びに没頭しているかぎりお片付けの必要を感じない。

「片付ける」ということは、「おもちゃを片付ける」と

も、「居間を片付ける」とも使う。このことから、このことばが、次の事態へ向かつての体制のたてなおしを意味することはたしかのように思われる。人は娘を嫁よめがせることを「片付ける」といったり、部屋の中の邪魔なものをとりはらって、ひろびろさせることも「片付ける」という。しかし、それが、娘を一人前に成人させ、親とともに第二の人生に進むこと、部屋をきれいにして客を迎えることを意味しているならば、それは、あなたがち、身勝手な態度の表われとばかりいえない。むしろ、目的を意識しない片付けこそ無意味で無責任というべきなのである。

一般に「片付ける」ということは、何か物事が次の時点に移るときにおきてくるものようである。われわれの生活では、物事を片付けなければ次へすすむのに不便なことがしばしばである。それは自分のみにとってだけでなく、一つの社会的要請である場合もある。世の中、ただ一人ですべてを仕切って生きているのであれば、どこがどうなっていようが、いつまで仕事をつづけようが気にすることはない。しかし、一日に昼と夜があり、一年に春夏秋冬の季節があるのも、人がそれを節として意識し、それによって生活にけじめをつけるためである。人生は長い歴史を通して、この節を設けるこ

との意義を知ったのである。こうした生活の節というものを考えたとき、その節々で自分を振り返り見つけなおすことは、次に進むべきステップを見とおすことにもなる。そして、今までやってきたことを整理して体制をたてなおす。そこに片付け、ということが必要となるのである。

熱力学に関する本の中で、次のようなことを読んだことがある。自然界は常に熱的平衡の状態すなわち無秩序へと進んでいる。これをエントロピー増大の法則と呼ぶそうだが、このような宿命を背負った自然界の中で、人間のこれに逆らう力は大きいというのである。本来、自然界の一員であるはずの人間が、無秩序の状態に秩序を与える特異な存在であるとするならば、逆に、それこそが人間の本性だともいえる。

このように見えてくると、「片付け」とは、それ自体一つの重要な創造だと考えなければならぬ。「お片付け」を子どもたちが進んでやるようにさせる方法も、そんなところにヒントがありそうに思えるのである。

(信州大学)